

図像学より見た西洋文明(古代篇)(序論)

——西洋個人主義の文明論的研究——

高 田 邦 彦

旧大陸のアジア州とヨーロッパ州は、西欧の学者によってユーラシア (Eurasia) 大陸と呼び習わされているが、その面積五、四二〇万平方秆の中の五分の四はアジア州 (四、四三〇万平方秆) であるから、むしろアジロープ (Asiropé) 大陸と呼ぶ方が妥当であると考えられる。しかし本稿では、慣例による呼称ユーラシアを用いておく。

ユーラシア大陸をアジア州とヨーロッパ州に分断する地理的境界は、まず北極海の沿岸に始まるウラル (Урал) 山脈がシベリア (Сибирь) を縦断して二、四〇〇秆続き、次いで世界最大の湖カスピ海 (Каспийское Море) が南北に一、二〇〇秆、その南端のアルメニア (Armenia) 高原に源を発するユーフラテス (Euphrates) 川がイラク (Iraq) 平原を貫流して、ペルシア湾に注ぐ。大体において、この地理的境界の東方がアジア州 (ただし西方に大き

ユーフラテス川とティグリス (Tigris) 川の流れる、いわゆるメソポタミア (Mesopotamia) (両河地方) は、従来世界文明の発祥の地と見做されて来た。紀元前四千年紀にこの地方の南部に発生したシュメール (Sumer) 文明は、世界最古の都市文明であつて、その地方に発生した古都市としては、ウル (Ur)、ウルク (Uruk)、キシュ (Kish)、ラガシュ (Lagash)、ニップール (Nippur) などが著名である。(しかし最近の考古学的発掘の結果、パレスティナのヨルダン (Jordan) 河畔の町イエリコ (Jericho) の遺跡は、六千年前のものであることが実証され、これが最界最古の都市であろうという説が有力になりつつある。) メソポタミア文明は、東西双方へ伝播し発展した。東方アジアに発生した諸文明は、左の様な系列を辿つて発展した。

西方ヨーロッパに発生した諸文明は左の様な系列を辿って発展した。

これら東西両世界は、その住民の思想・行動、社会のあり方において、すこぶる異なった特色を示している。大雑把に言えば、東方アジア世界は集団主義 (groupism) 的であり、西方ヨーロッパ世界は個人主義 (individualism) 的である。

的である。宗教を見ると、西方はユダヤ文明に始まる一神教、いわゆる啓示宗教が支配的で、個々人は天地創造の唯一者と対決する。⁽²⁾これに対し東方はインド文明に始まる多神教が支配的で、個々人は異なる機能を有する神々を崇拝し、大勢の他者に支えられて、いわば多くの因縁に結ばれて生きている、という意識が濃厚である。従って常に何らかの集団、国家・社会とか、血縁集団なる同族・家族とかの連繫を予想しつつ生活する。

十九世紀ドイツの社会学者フェルディナント・テンニース⁽³⁾ (Ferdinand Tönnies) は社会集団の類型を研究し、これを「共同社会 (ゲマインシャフト) (Gemeinschaft)」と「利益社会 (ゲゼルシャフト) (Gesellschaft)」の二種に分類した。ゲマインシャフト (基礎社会とも訳す) とは共同生活が行なわれ、その成員が多かれ少なかれ自由に、日常生活の多様な部門において、他の成員と関係し合う組織と規定され、ゲゼルシャフト (機能社会とも訳す) とは特定の人たちの利益、または一連の利益を共同して追求するために、目的を本として成立した社会と定義づけられる。ゲマインシャフトにおいては、人々は経験的には分離しているが、本質的には結合し続ける。人々は互いに愛し合い、互いに慣れ親しみ易く、共に語り共に考え合う。ゲゼルシャフトにおいては、人々は本質的に分離している。ここでは個人自身のためよりも、かれと結合している人々のためになるような活動は行なわない。人々はそれぞれひとりぽっ

(1) 以前の「小アジア半島」。現在は「トルコ半島」とも呼ぶ。

(2) ユダヤ教はヤハウェ (Yahweh)、あるいはイエホウア (Jehovah)、キリスト教は父なる神、子なるキリスト、聖霊の三位一体を唱えるが、父なる神が至上である。ローマ帝国によってキリスト教が全ヨーロッパに普及する以前のゲルマン民族の原始宗教は多神教 (Odin, Thor, Tiw, Freya などの神々を信ずる) であった。

(3) Ferdinand Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. 1887. 邦訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波文庫、一九五七年刊。

ちで、自分以外のすべての人々に対しては緊張状態にある、と述べられる。

西欧の学者は、人類の原始社会は集団主義的な共同社会であったと考え、文明の進歩につれて、次第に個人主義的な利益社会に移行したと考えた。フランスの社会学者レヴィ・ブルジュール⁽⁴⁾はそのように考え、テンニースも基本的にはその立場である。従って西欧の学者は、一般に東方アジア世界を未開社会と断定し、西方ヨーロッパ世界を先進社会と自負して、悦に入っていた。カルル・マルクス (Karl Marx) とフリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels) に至っては中国文明やインド文明も含めて、東洋社会全体を「アジア的生産様式⁽⁵⁾」と規定し、これをメソポタミタ、エジプト、ペルシアなどの古代奴隷制の段階にあるものと断じ、「アジア的停滞⁽⁶⁾」として処理した。これは途方もない事実誤認であって、この所説については由来数多くの反論が惹き起こされた⁽⁶⁾。仮に精神文化の向上を進歩と呼び、物質文明の普及を発展と称するならば、悠久に流れて変化しないかのように見えるインド文明も、同じ政治類型の反覆にしか過ぎないかのように見える中国文明も、時代が進むにつれて、著しい進歩・発展を遂げた事実が看取される。まして東方アジア世界の東端に位置して、アジア世界の諸特質を典型的に具備しているわが日本文明については、その歴史を繙^{ひもと}けば、二千年前の大和時代に始まり、奈良、平安、鎌倉、室町、織豊、江戸時代と進むにつれて、絶えず進歩・発展した跡が歴然としていることを認めずにはおれない。これをしも、どうして「アジア的停滞」の一句で評し去ることができようか。

上智大学客員教授の日本学者 (Japanologist) グレゴリー・クラーク⁽⁷⁾ (Gregory Clark) 氏は、オーストラリアの外交官であったが、ヴェトナム戦争の最中に日本を訪れて、日本文明の異常な特色に驚き、日本人を今だに情緒的 (emotional) な集団主義 (groupism) の価値体系を持つ、世界で最も特異な民族であると考えた。日本人よりも多分民族的結束が固い中国人やインド人でさえ、日本人と較べれば理念的 (ideological) な個人主義 (individualism)

の価値体系を持つ民族であると考えられる。(クラーク氏は外交官として中国にも勤務していた。)

西アジア(中近東)地方からインド世界を経て東南アジアに至る熱帯諸国では、一族・家族の羈絆が極めて強く、一族中の一員が出世して政治権力を握ると、他の成員を政府の要職に就けて面倒を見るのが常道であり、それをしない権力者は一族からの非難の矢面に立たされる。しかし一族の成員のすべてが廉直有能な人士であるとは限らないために、かれらは野放図な汚職に耽って、権力者の名声と威信を失い、結局は権力者の没落を早めることになる。若干

(4) Levi Bruhl: *Les Fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, 1910. 邦訳『未開社会の思惟』岩波文庫、一九五三年刊。

(5) マルクスのこの所説は、次の書に述べられている。『資本主義的生産に先行する諸形態』(邦訳、国民文庫、大月書店、一九六三年刊) この書はエンゲルスとの共著であるが、もともと次の書 Karl Marx: *Grundriss der politischen Ökonomie*, 1958. (邦訳『経済学批判』岩波文庫、一九五六年刊) の第二篇「資本の流通過程」に付された論文集である。

(6) 「アジア的生産様式」に関する論争には誤解があると、邦訳者手島正毅氏は言う。かれはその誤解は次の二点に要約できると述べて、マルクス、エンゲルスのためには陳弁これ努めているが、今見れば滑稽でさえある。(一)アジア的封建制の段階における専制君主、アジアの封建的地代形態、公共事業および残存ウクライド(社会経済的要素)としてのアジア的村落共同体を、支配的なアジア的生産様式(経済的奴隸制)と誤認したこと。(二)資本主義的世界体制の独占経済において、インド、中国などに対する帝国主義的支配によって生じたアジア諸国の「停滞性」を、アジア的生産様式の「停滞性」にすり変えたこと。しかし手島氏がどんなに弁護してみても、このような誤解を招いた、マルクス・エンゲルス両氏のアジア理解が、これほど幼稚で低次元であったことは、率直に認めねばなるまい。

(7) Gregory Clark: *The Japanese Tribe: Origin of a Nation's Uniqueness*, 1977. (邦訳『日本人—ユニークさの源泉』サイマル出版会、一九七七年刊)

の実例を挙げれば、フィリピンのフェルディナンド・マルコス⁽⁸⁾ (Ferdinand Marcos) 大統領は、米国の支援で一九六五年以後、独裁政治を強行したが、自家と一族が利権を漁って巨万の富を築いたため、民衆の反感を招き、一九八六年にアキノ (Aquino) 派の反撃に逢って、国外に追放された。またインドネシアのスハルト⁽⁸⁾ (Suharto) 大統領は、米国の使囑により建国の英雄スカルノ (Sukarno) 大統領を追って最高権力の座に就き、三十二年間独裁を擅^{はし}まにしたのち、米国に見棄てられて一九八〇年に失脚し、同時にかれの息子子女は汚職の廉^{かど}で裁判に付され、今や昔日の豪奢に変わる、侘^わしい圜^{れい}圜^いの身である。最も哀れを留めたのはインドのバングラデシュ (Bangladesh) 人民共和国の創設者シェイク・ラーマン (Sheikh Rahman) 大統領である。かれは東パキスタン (すなわちベンガル (Bangal) 州) アッサム (Assam) 州) をパキスタン (Pakistan) 本部より分離独立させた英雄であったが、一族の汚職のため名望を失い、一九七五年のクーデターによって、かれ自身も一族と共に惨殺された。わずか三年間の、まことにはかない栄耀であった。

目を西アジア (中近東) 地方に転ずると、イスラーム教諸国では権力者一族の利権漁りと奢侈放埒は日常茶飯事であって、クーデターやテロによって殺害もしくは追放された権力者も多い。イラン国王パフラヴィー二世 (Pahlavi II) は一九七九年の革命の際、一族を率い、大見栄を切って国外へ脱出し、遂に帰国の夢は叶わなかった。国外へ亡命した流謫の国王を受け容れてくれる国はなく、最後はエジプトのサーダット (Sadat) 大統領の友情に縋^{すが}ってカイロに赴き、辛うじてリファイーエ・モスク (Rifaie Mosque) に永眠の墓所を得た。またイラク国王ハーシム (Hashim) 家のファイサル (Faysal) の一族は一九五八年にカーシム (Qasim) 准将らの共和革命によって、外遊中の皇太子以外すべて惨殺された⁽⁹⁾。しかしこれらの墮落したイスラーム諸国の権力者たちの中にあって、汚職に手を染めず、終始清廉潔白な生活を通した立派な政治家が二人だけいるという⁽¹⁰⁾。ひとりハクルド (Kurd) 人の英雄で、

十二世紀にファティマ (Fatima) 朝を倒してアイユーブ (Ayyub) 朝を興したサラ・アルディーン (Salah al-Din) (英語ではサラディン (Saladin)) であり、いまひとりは二十世紀エジプトの革命家で、墮落国王ファルーク (Faruq) を国外へ放逐し、スエズ運河の国有化を断行したナーシル (Jamāl 'Abd al-Nāsir) (日本ではナセル) である。前者は一一八七年にキリスト教徒のイェルサレム (Jerusalem) 王国を滅ぼしたが、住民に寛大な措置を執り、聖地奪回のため第三十字軍を率いて来た英国王リチャード一世 (獅子心王) (Richard I, the Lion-Hearted) と雌雄を決するためアシュケロン (Ashkelon) 郊外で一騎討ちをして譲らなかったという、温情と勇武を兼備した、世界史上たぐい稀な傑物であった。いまクルド人はロシア、トルコ、イラン、イラクの諸国に国土を細分され、迫害されて悲運を啣っているが、サラディンこそはクルド人にとって、史上唯一の希望の星である。ナセルは一九六七年の第三次中東戦争でイスラエルに敗れて大統領を辞任したが、国民の要望黙し難く、再び大統領に復帰したという、稀有の経歴を有する偉材である。サラディンは秘書バハーアッディーンの著わした伝記により、ナセルは盟友ヘイカルの著わした伝記によって賞賛されている由。どんな腐敗した社会にも清廉潔白の士はいるものだが、一千年間に二人だけとは、日本文明と比較して少な過ぎるように感ずる。

東方アジア世界の集団指向性の検討はこのくらいにして、話題を西方ヨーロッパ世界に転じよう。メソポタミア地

- (8) Chalmers Johnson; *Blowback the Costs and Consequences of American Empire*. 2000. (邦訳『アメリカ帝国への報復』集英社、二〇〇〇年刊) p. 100, p. 103

- (9) これは昭和三五年の事件で、偶々日本では正田美智子嬢に、当時の皇太子昭仁親王の縁談が持ち込まれていた。美智子嬢の母堂は、日本でも同様の事件が起こる危険性はないかと心配して、宮内庁に執拗に問い合わせたと言われる。

- (10) 牟田口義郎著『カイロ』文芸春秋社、一九九二年刊、三九三頁、一四〇頁。

方の北半部はアッシリア (Assyria) と呼ばれるが (ちなみに南半部はバビロニア (Babylonia))、アッシリア地方にはエシュヌナ (Eshnunna)、マリ (Mari) などの大都市において、完成度の高い個人彫像が制作されていた。この文明の先鋒はシリア・パレスティナを経て、紀元前二九世紀にはエジプトに到達し、いきなり「ナル・メル (Nar-Mer) 王の戦勝記念化粧板」という高度の傑作を生んだ。(ナル・メル王はエジプト王朝の始祖メーネース (Menes) 王に比定される。) 地球上のいかなる文明も単独に自然発生し、自己完結的に成長したものではなく、いずれも他の諸文明から直接・間接の刺激・感化を受けて成立するものであるが、エジプト文明はメソポタミア文明の刺激を受けて、これを高度の個人指向型文明に仕立て上げ、それを古代ギリシア文明、ローマ文明へ発展させたと考えられる。ここで個人指向型文明は一気に頂点に駆け登った。

古代ギリシアにおける個人主張の強烈さの例を挙げると、紀伝体の歴史書 (編年体の「年代記」ではない) を敘述して「歴史の父」と称されるヘーロドトス (Ἡρόδοτος) は、その著『歴史 (Ἱστορίαι)』(俗称「ペルシア戦争史」) の開巻劈頭に堂々と名乗りを挙げて、「本書はハリカルナッソス (Ἱαλικαρνεύσος) 出身のヘーロドトスが、……みづから研究調査したところを書き述べるものである。」(松平千秋訳) と宣言する。次いで『戦史 (Ἱστορίαι)』(俗称ペロポネネース戦争史) を著わしたトゥーキュディデース (Θουκυδίδης) もその書の冒頭に述べる。「アテーナイ (Ἀθηναί) 人トゥーキュディデースはペロポネネース (Πελοποννήσος) 人とアテーナイ人が互いに争った戦いの様相を綴った」と。(久保正彰氏訳)

ところが、これに比較して、日本の歴史撰者の慎ましさはどうであろう。日本文明最古の歴史書『古事記』と『日本書紀』においては、筆録者はどちらも大安万呂であるが、撰者と称される稗田阿礼と舎人親王なる人物が何者であるか、具体像が全然浮かんでこない。選者兩名は歴史編纂という事業の中に埋没しているのである。梅原猛氏はまる

で迷宮事件を解く推理作家ながらに、両書とも蔭の撰者は藤原鎌足の次男不比等であると推定した。⁽¹⁾氏の結論は肯綮に中^{けい}あ^たっている。(ついでながら中国文明に言及すると、集団指向的なアジア文明の中にあつて、中国文明は個人指向性が比較的強く、紀元前二世紀の司馬遷の『史記』以来、明朝までの各王朝の歴史「二十四史」の著述は、すべて名の知れた史官が行なっている。ただし明朝の長編小説『金瓶梅』の作者は不明である。中国文明とは反対に、インド文明は「空」の思想が強いためか、見るべき歴史書をほとんど残さなかった。)

後述するようにギリシア文明は、政治家、軍人、文人などほとんどの社会的有名人名について個人記念像が刻まれており、(ヘレニズム時代になると子供や老婆や、娼婦、奴隸のような庶民の彫像まで制作されている。)その特性はローマ文明に継承された。ローマ文明はギリシア文明の優れた彫像を模倣して多数後世に伝えてくれたが、およそ世界のあらゆる文明の中でギリシア、ローマの地中海文明ほど、卓越した個人記念像を制作した文明はない。またこの地中海文明ほど、個人の弁論を重視した文明はない。(ギリシアの弁論家デーモステネース (Δημοσθένης) とローマの雄弁家キケロ (Cicero) の弁論集は、人類文化の至宝に数えられている。)以上の諸点から勘案して、地中海文明は、世界の諸文明の中で、最も個人指向性の強烈な文明であったと言える。この地中海文明を古典古代 (Classic Antiquity) と仰ぐ近代以降のヨーロッパ人が、強い個人指向性を持つようになったのは理の当然である。西ローマ帝国の滅亡 (四七六年) 後、およそ一千年を経て (一四五三年以降) イタリア半島北部の諸都市 (パードヴァ (Padova)・ヴェネーツィア (Venezia)) に個人記念像が復活する。それと平行して、シエーナ (Siena)・フィレンツェ (Firenze)・ペルーシア (Perugia)・ピッサ (Pisa) など中部イタリアの諸都市にいわゆるルネサンス (Ren-

(11) 梅原毅著『神々の流竄^{るざん}』集英社文庫、一九八五年刊。

aissance) (学芸復興) と呼ばれる文化現象が繚乱と開花し、個性的な芸術家が陸続と輩出する。その機運は地中海世界(南ヨーロッパ)に漲みなぎった個人指向性に挑発されたものではなからうか。

さらに十六世紀になると、アルプスを越えた北欧に、宗教改革(Reformation)という新しい文化運動が興り、ドイツ人マルティン・ルター(Martin Luther)、スイス人ウルリヒ・ツヴィングリ(Ulrich Zwingli)、フランス人ジャン・カルヴァン(Jean Calvin)が、ローマ法王を頂点とするカトリック教会に叛旗を翻えして、新しいプロテスタント信仰を喧伝する。ルターはローマ教会の聖職者階級の存在意義を否定して、「聖書によるのみ(Sola scriptura)」、恩恵によるのみ(Sola gratia)、信仰によるのみ(Sola fide)、「を信条とする。またかれはいわゆる「万人祭司説」を説き、神と個々人との間に聖職者階級や聖母マリアのような媒介者を認めず、個々人が直接神と対決して、最後の審判を受けるべきことを主張した。ここにおいて西欧文明特有の「近代的自我」が確立したと歴史家は考える。これらの過程を通して、西欧の個人主義は完成の域に達したものと見做してよからう。しかし「万人祭司説」は、西欧の学者が考えるように、ルター個人の独創ではない。すでに七世紀にアラビア半島西部においてムハンマド(Muhammad)が創始したイスラーム教(Islamism)は、聖職者を設けず、すべての信徒が平等の資格で聖典を読み、唯一神アッラーに礼拝を捧げるのである。ただし共同礼拝の指導者としてシーア派(Shi'ah)⁽¹²⁾ではイマーム(Imam)を設けて最高権威者とする。(イランの最高指導者であったホメイニ(Khomeini)師や、現在のハメネイ(Khamenei)師はこれに当る故に、大統領の上に立つ。)スンニ(Sunni)派は、イマームほどの権威者ではないが、もっと一般的な指導者として、ワリー⁽¹²⁾(Wali)を設ける。プロテスタント教会では、信徒の指導者として、牧師(pastor, clergyman)と長老(presbyter)とを設けたが、これもイスラーム文明の影響であるかも知れない。

こうして西欧の個人指向性は、近代になって益々強化され、大西洋を渡って、西欧文明の出店であるアメリカ合衆

国に到達する。この国では、個人主義もその墮落型である利己主義も、西欧の主要国（フランス、イギリス、ドイツ、イタリア）におけるよりも、一段と尖鋭化し、どぎつい。野球やバスケットボールの花形選手が数十億円の契約金を得たり、大会社の社長が社員の平均給与の五百倍の給料を持ち去ったりする。この倍率は二十年前には三十倍であったとか。その時分日本の会社の社長の給料は、社員の平均給与の四倍であった。何という健全さ。何という慎ましき。これに反し米国では、少数の富豪が国家の財産を独占する。1%の富豪が米国の国内総生産（Gross Domestic Product）の三四%を独占し、10%の富裕階級が六七%を独占する。大多数の庶民は窮乏化して犯罪に走る。治安が悪化し、安心して住める社会ではない。殺人、窃盗、婦女暴行の凶悪犯罪は、人口割りにして日本の一三〇倍、銃砲による殺人は四七〇倍という凄まじさである。監獄に収容されている囚人数は二〇〇万人で、世界最高記録である。（日本では現在五万六千人であるが、近く六万人になるのではなからうかと憂慮されている。）このような米国の現状はあまりにもひど過ぎるが、しかしこれは、世界で最も個人主義も利己主義も強烈な米国の⁽¹³⁾ような個人指向型文明が行きつく究極の姿なのであろう。この文明は十九世紀になると、太平洋を越えて、東方アジア世界の集団指向型文明の最先端にある日本文明に、真向微塵^{まっこうみじん}と撲りこみをかけてくる。それが嘉永六年（一八五三年）の黒船の来航である。一八五三年（嘉永六年）、アメリカ合衆国の大統領フィルモア（Millard Fillmore）の厳命を受けた海軍少将（代将）

(12) 井筒俊彦著『イスラーム文化』岩波文庫、一九九一年刊、第四章。

(13) 青色ダイオードの発明者、中村修二氏は、米国へ渡って米国人にそのかされ、自己の発明による代価として、二百億円を旧主の会社に要求し、一旦は地方裁に認められたが、最高裁は再審して、この金額を1%の二億円に下げた。これが日本社会の常識である。先年ノーベル化学賞を受賞した島津製作所の田中耕一氏は、これは研究グループの共同成果であるとして会社に一文も報酬を要求しなかった。会社は田中氏を専務取締役役に昇格させて、その功に報いた。

ペリー (Matthew C. Perry) の率いる艦隊が、浦賀の沖合いに出現して、徳川幕府に開港を迫ったとき、日本人は西洋文明という圧倒的に強大な異質文明に直面して心底から震え上がったのだった。ペリーは大砲を江戸の町に向け、開港しなければこの町を焼き払うぞと脅迫し、幕府の使節には白旗を与えて、承知ならばこの旗を揚げて来いと申し渡した。最初から降伏の強要である。江戸の町は大火が起これば、十万人の住民が焼死することになるのは、すでに一六五七年 (明暦三年) の「振袖火事」で実証済みである。江戸の町の女、子供、老人は悉く関東地方の田舎へ疎開し、町には屈強の青年だけが残って、上陸するかも知れぬペリーの海兵隊と戦う覚悟を固めていた。正しく元寇ともまがう「米寇」であった。米国の歴史教科書には、「わが国は日本と二度戦って、二度とも勝利を得た。一度はペリーのとき、二度目は太平洋戦争のとき」と書いてあるという。西欧文明の渡来はこれが最初ではなく、すでに三百年もまえの一五四三年 (天文十二年) にゼイモート (Francisco Zeimoto) の三人のポルトガル商人が中国のジャンクに乗って嵐に流され、大隅の種子島に漂着して鉄砲を伝え、その六年後にはスペイン人の宣教師シャヴィエル (Francisco Xavier) が来朝して吉利支丹宗門を伝えていた。このカトリック西欧文明の影響は悔り難いものではあったが、当時それほど落差のなかった日本文明は、島原の乱を最後とする大きな犠牲を払ったのち、一六三九年 (寛永一六年) にこの新来文明を撃攘することに成功した。しかしそれ以来、日本が二百余年の鎖国の堕眠を貪っているうちに、プロテスタント西欧文明は科学技術の長足の進歩によって産業革命を成し遂げ、資本主義の圧倒的な財力、武力でもって世界の後進地域を惴伏させ、それを着々と植民地化しつつあった。その文明の尖兵たるアメリカ合衆国が、軍艦と大砲を並べて日本人を恐喝し、太平の夢を揺り醒ましたのである。

日本の慧敏な先覚者たちは、西欧が大砲と機械において (つまり科学技術において) 遥かに立ち勝っていることを逸早く見抜き、和魂洋才を唱えて西欧の科学技術を導入することに専心した。幕末の屈辱以来百余年に及ぶ日本朝野

の近代化の努力は、同時に西洋化の努力でもあった。そうして日本は西欧文明に同化し、その武器をおのれの武器とすることによって、辛うじて欧米諸国による植民地化を免れたのである。

百余年の欧化運動は、一見日本を西欧の属国と見まごうまでに、変貌させ変質させた。もはや日本文明は、その形姿ばかりか内実までも西欧文明に蝕まれて、本来の主体性を保ち得なくなったかのような印象さえ与える。議会制度、官僚機構、会社組織を始め、交通機関、衣食住、レジャー、スポーツなど日常生活の隅々に至るまで、西欧文明は日本人を雁字搦めに押えてしまったかのように見える。しかしそれでもなお日本文明と西欧文明は、互いにまるで異質的な存在なのである。日本人が西欧を旅してその風物や人間に触れば触れるほど、心の中に妙な違和感が募ってくる。たとえ西欧人の衣食住を巧妙に模倣しても、所詮日本人は日本人独得の考え方、感じ方しかできないのだという諦観にも似た想念が、一段と強まってくるのである。

もちろん最近の欧米人の中には、日本人も要するに欧米人と異ならない人間なのだと、両者の共通項を強調する学者も殖えてきつつある。ドナルド・キーン (Donald Keene) 氏はその旗頭であって、日本人は自身で思い込んでいるほど特異な国民ではない。例えば日本の最も特殊な文学様式である俳句でさえ、欧米人には日本人と同じように理解

(14) その後一九二三年(大正十二年)の関東大震災のときも、一九四五年(昭和二十年)三月十日の大空襲のときも、無慮十万人の焼死者を出している。

(15) 例えば、佐久間象山(『海防論』)や横井小楠(『国是三論』)は、西欧先進諸国が軍艦や大砲において圧倒的に優れているが、道徳においては遙かに劣っていることを洞察し、技術の導入のみを勧めた。その方針に従って、明治初年の啓蒙思想家たちは、和魂洋才を唱えた。従来の和魂漢才の焼き直しである。

できるのでという年来の主張を、機会ある毎に繰り返している⁽¹⁶⁾。日本人も欧米人も同じ人間 (homo sapiens) に属している以上、数多くの共通項があつて当然であるし、それを強調すること自体は、突拍子でも酔興でもない。また今後日本人も欧米人も、狭隘化した地球の上で互いに共存共栄を図らねば、人類全体の永続は難しいというのも、疑い得ない事実であろう。しかしわれわれは、まず両者の相異点を十分に認識し合い理解し合った上で、なおかつ人間的共感に生きようと努めるのでなければ、従来の誤解は益々増幅され、事態の改善は益々絶望的になるのではなからうか。

早い話が俳句を例に挙げると、キーン氏の顔を逆撫でするような生理学上の一理論が数年前に発表されて、江湖の話題を読んでいる。病理学者の角田忠信氏は、失語症の治療法を模索するうちに日本人の脳の特異な働きに気付いた⁽¹⁷⁾。それによると、世界の大多数の人種は母音を脳の右半球(感性脳)で受け、子音を左半球(知性脳)で受けとめるのに対し、日本人と(ハワイのカナカ人)のみは母音子音ともに左半球で受けとめる。従つて、ほとんど母音から成り立っている虫の音や動物の鳴き声は、大多数の人種にとっては単なる雑音に過ぎないが、日本人にとっては言葉と同じようにある意味を伴っている、というのである。とするならば、「行水の捨てどころなし虫の声」(鬼貫)とか、「病む雁の夜寒に落ちて旅寝かな」(芭蕉)とかいう俳諧の境地は、虫の音や鳥の声に対して物のあわれを感じる日本人特有の心ばえがなければ、十二分に理解することは難しいであろう。俳諧ばかりではない。もっと字数の多い和歌や詩においても同様である。

「ほろほろと山鳥の鳴く声聞けば父かとぞ思う母かとぞ思う」(行基)

「奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声聞くとときぞ秋は悲しき」(伝、猿丸太夫)

「真菅生うる山田に水をまかすればうれし顔にも鳴くかわずかな」(西行)

日本人は鳥やけだものの声に心をいざなわれて感情移入を行い、物のあわれを覚えて歌を詠み上げたのである。現代詩の例を若干挙げよう。

室生犀星「夏の朝」、「なにといふ虫か知らねど 時計の玻璃はりの冷たきに這ひのぼり、つうつうと啼く もの言へぬ 虫けらものの悲しさに」

竹久夢二「辞世の歌」「日にけ日にけ かつここの啼く音ね聞きにけり かつここの啼く音は おほかた悲し」

このような心象風景は、殺伐なはずの軍歌にさえ詠み込まれて、日本の軍歌にそこはかとないうる哀愁を帯びさせている。(藪内喜一郎作詞「露宮の歌」)「戦さする身はかねてから捨てる覚悟でいるものを鳴いてくれるな草の虫」そしてやはり、身近にある小さな虫や動物に対する人間的共感、刹那的に詠み上げた短い俳句においてこそ、最も見事に結晶しているように思われる。

「寝がへりの方になじむやきりぎりす」(犬草)

「われと来て遊べや親のない雀」(一茶)

「麦飯にやつる恋か猫の妻」(芭蕉)

これらの句はすべて角田氏の解明した日本人の脳の特異な働きによって紡ぎ出されたものに相違ない。

このように考えてくると、日本人はやはり世界のあらゆる人種の中で、ひと味異なった変種であり、日本人と欧

(16) ドナルド・キーン『碧い眼の太郎冠者』中央文庫、一九五七年刊、ほか。キーン氏の俳句の傑作を一句、紹介する。「罪なくも流されたしや佐渡の月」

(17) 角田忠信『日本人の脳』大修館書店、一九七八年刊。

米人との本質的相違はキーン氏の憶測を超えて遥かに大きいのではなからうかという思いに誘われる。私はここで、だから日本人の方が芸術的に優れているとか道徳的に勝っているとか主張しているのではない。ただ日本人は、母音の多い特殊な言語を幼時から使用しているために、脳の作用が欧米人と若干異なっているという事実を述べたまでで、優劣とか善悪とかの問題ではないのである。おそらく日本人は、虫の音や動物の鳴き声に共感できる代わり、欧米人が当然と考える純粹な知的操作において、大きな欠陥を持っているに違いない。日本人が俳句や和歌、せいぜい連歌くらいの短い詩形に長所を発揮して、西欧の諸民族が誇っているあの雄大な叙事詩に縁が薄いのも、『平家物語』を叙事詩と見做せば話は別だが)そのせいではなからうか。一方西欧の詩人の中で、身近な虫や動物に共感を寄せた異色の詩人といえば、私は寡聞にして、フランシス・ジャム(Francis James)しか思い出せない。しかもかれが哀れな驢馬や仔猫に同情し、こおろぎの鳴き声におのが身の悲運を唧かったとき、西欧人はかれの詩を評価するのに大いに戸惑ったのだった。このような事実は、日本人と欧米人の感性と知性における本質的差異を雄弁に物語るものではなからうか。

欧米人が日本人との共通点を力説しがちであるのに引きかえ、戦後の日本人学者の間では、むしろ日本人の特異性を解明しようとする意欲的研究が、昭和四十年代に踵を接して現れ始めた。これは、かつて日本人の社会・心理上的特異性をすべて発展段階の相違から説明しようとしたマルクス主義の神話が、昭和三十年代以降の歴史的事実のまゝに崩れ去ったためでもある。これらの研究は、精神分析学、社会学、文化論など種々の分野に亘って見られるが、なかんずく、土井健郎氏の『「甘え」の構造』(弘文堂、一九六六年刊)、中根千枝女史の『タテ社会の人間関係』(講談社現代新書、一九六七年刊)、鶴見和子女史の『好奇心と日本人』(講談社現代新書、一九七二年刊)などは、意欲的かつ独創的研究として高く評価してよい。これらの所説に対して、種々の異論が部分的には唱えられているが、門

外漢の私はその大筋が承認されているものと見做して、そこに解明された日本人の特異性を以下に略述するに留める。すなわち日本人は欧米人に較べて自主独立の精神に乏しく他人に対して「甘える」(過度の期待をする)という特殊な心理を持つこと、日本人は集団への帰属意識が強く、平等の市民としてのヨコの関係よりも集団内のタテの関係を重んじること、日本人は他人の(ひいては他民族の)生活を覗きたがる異常に「好奇心」の強い民族であり、従って

(18) 例を挙げると、

フランス……『ローランの歌』(十二世紀)、『バラ物語』(十三世紀)、『諸世紀の伝説』(ユーゴ、十九世紀)。

イギリス……『アーサー王の最後』(マローリー、十五世紀)、『樂園喪失』(ミルトン、十七世紀)、『ドン・ジュアン』(バイロン、十九世紀)。

ドイツ……『ニーベルンゲンの歌』(十三世紀)、『トリスタンとイゾルデ』(十三世紀)、『ヘルマンとドロテア』(ゲーテ、十八世紀)。

イタリア……『神曲』(ダンテ、十四世紀)、『狂えるオルランド』(アリオスト、十六世紀)、『イエルサレム回復』(タッソ、十六世紀)。

スペイン……『エル・シードの歌』(十三世紀)。

ポルトガル……『ウズ、ルジアダス』(カモンイシ、十六世紀)。

ポーランド……『パン・タデウシュ』(ミツキエーヴィッチ、十九世紀)。

ロシア……『エヴゲーニイ・オニエーギン』(プーシキン、十九世紀)。

(19) これらの詩の原題は、

驢馬について、「私はろばが好きだ」(J'aime l'âne…)。

猫について、「憐れみで死にそうだ」(Le crève de pitié…)。

こおろぎについて、「夜のしじまの中に」(Pans la silence de la nuit…)。

そのほか、仔牛、犬、鳩、小鳥など、かよい動物に寄せるかれの詩は感動的である。(近年、全邦訳詩集が出版された。手塚伸一訳に『フランス・ジャム全詩集』、青土社、一九九二年。)

日本文化は「のぞき文化」であること、などである。これらの特異性は、それぞれ日本人の性格の一面を分析して得られたものであるが、これらを包括的に説明する基本構造は、いったい何であろうか。

この点に触れた興味深い研究は、前述したグレゴリー・クラーク氏の「人間関係社会論」である。氏は日本人が世界で最も特異な民族であることを主張する、謂わばキーン氏と対蹠的な立場に立つ学究であるが、その主著『日本人——ユニークさの源泉⁽²⁰⁾』(サイマル出版会、一九七七年刊)において、次のように論究している。人類社会は本来は部族社会であって、情緒的 (emotional) な集団指向型の価値体系を持っていたが、他民族と接触し抗争する過程において、理念的 (ideological) な価値体系を持つ社会へと移行した。前者は人間関係社会であって本質的に集団主義 (groupism) であるが、後者は原則関係社会であって、人間関係が崩れたために個人主義 (individualism) となる。欧米諸国はもちろんのこと、一見氏族主義的に見える中国・インドでさえ、内容は濃厚な原則関係社会である。しかるに日本のみは、島国という特殊な地理的環境にあって、他民族と頻繁に交渉する歴史的体験を持たなかったため、人類本来の部族的な人間関係社会を、原則関係社会に変質させることなく、そのまま維持してきた。日本人の特異性は、この人間関係社会に固有の家族型集団主義から必然的に由来する。従って、土井氏の「甘え」も、中根女史の「タテ社会」も鶴見女史の「好奇心」も、すべて情緒的な人間関係社会の産物なのであると。これは肯綮に中る指摘である。

ところで、話を日本と欧米諸国のみに限って言えば、クラーク氏の理論から次のような図式を引き出すことができる。人間関係社会を規律するのは人間の感性であり、原則関係社会を規律するものは人間の理性である。前者は基本的に情緒主義であって必然的に集団主義を指向し、後者は基本的に主知主義であって、必然的に個人主義へ傾く。従って日本は情緒主義Ⅱ集団主義的社会であり、欧米は主知主義Ⅱ個人主義的社会であると。

ここで若干付言すると、個人主義とは個人の人格的自由を尊重し、社会や集団の利益よりも個人のそれを優先させる態度のことであって、歴史的に見れば、西欧のルネサンス、宗教改革期に始まり、近代資本主義の成長と共に発展した、謂わば歴史的概念である。従って、インドや中国が原則関係社会であるからといって、それが必然的に個人主義を育てたとは考えにくい。原則関係社会が生み出すのは個人主義そのものではなく（曖昧模糊たる概念ではあるが、集団指向性に対して）個人指向性とも言うべきものではなからうか。西欧社会は、本来具有していたこの個人指向性が、近代に至って強まったために、類似した性格を有する古典古代文明（ギリシア・ローマ文明）に触発されてルネサンスと宗教改革を迎え、それ以後、近代資本主義の発展と共に明確な個人主義を招来した（近代的自我を確立した）と見るべきではなからうか。

要するに西欧は主知的Ⅱ個人指向型社会であり、日本は情緒的Ⅱ集団指向型社会であると規定しても、それほど的外れではないと考えられる。そしてこのような視点に立って西欧社会を観察してみると、われわれ日本人に妙な違和感を覚えさせた西欧社会の特殊な事象の謎が、少しずつ解けてくるような気さえするのである。

私事に亘って恐縮だが、私が初めて西欧の土を踏んだのは一九七二年（昭和四七年）のこと、所はパリであった。

幼い頃から憧れていたパリでもあり、生まれて初めての外国でもあって、見るもの聞くものみな珍しく、最初の一週間ほどを夢見心地に過ごしたが、パリでの生活が軌道に乗ってくると、次第に最初の驚きから醒めて、新奇かつ雑多

(20) Gregory Clark: The Japanese Tribe: Origin of a Nation, s Uniqueness. 1977. (邦訳『日本人—ユニークさの源泉』サイマル出版会、一九七七年刊)。末尾の部分については、同氏と竹村健一氏との対談集『ユニークな日本人』（一九七九年刊）によった。

な印象を無意識のうちに整理し始めた。それはまず日本との共通項とも言うべき印象をひとつひとつ識域から外して行って、あとに残った特殊西欧的な事象のみを、日本の実情と比較しながら吟味するという心的作業であった。そのとき私は、日本が百余年間欧化の努力を続けながら、今だにいかに多くの事を理解できないか、いかに多くの事を模倣せずにすましているかという点に、改めて驚かざるを得なかった。

一日本人として奇異な感じを覚える事象が多かった中でも、パリの町中いたる所に建立された記念像にはつくづく圧倒された。名古屋育ちの私には銅像⁽²¹⁾と言え、どの小学校の校庭にもあった二宮金次郎の、柴を背負った読書姿と、鶴舞公園の竜ヶ池の畔りにあった加藤高明の傲然と胸をそらせた立ち姿としか、思い浮かばなかった。その加藤高明像も第二次大戦中に金属供出のため鋳潰されて、今は空しく台座を残すのみであり、また国家主義体制内での勤勉の模範であった二宮金次郎も、供出されたあと敗戦後の民主主義教育の校舎に復帰できないままである⁽²²⁾。

それに引きかえパリの記念像の豊富かつ多彩なことはどうであろう。ある場合にはそれは、古代ギリシア・ローマの神話に由来する空想上の神々、妖精、半神の英雄であり、ある場合には聖母子や中世の伝説上の聖者、勇士であった。しかし最も多くの場合には、歴史上実在したいわゆる有名人であって、王侯あり皇帝あり、政治家あり軍人あり、学者あり芸術家あり、聖職者あり実業家ありで、実に千差万別である。それらの人物を象る彫像は、パリの町のどこにもある広場か公園に、公共建造物のまえや大通りのほとりに、それぞれ美術の粋を凝らした思い思いの姿で建てられ、異郷の旅人を慰めてくれるばかりか、時にはそこばくの感動さえ与えてくれたのである。

試みに旅行案内書を繙くと、パリの町には個人記念像だけでおよそ二〇〇基あると注記してあった。市域わずか一〇五平方軒のパリ、東京区部の面積(五七九平方軒)のわずか十八パーセント、名古屋市の面積(三二七平方軒)と比較してもその三分の一に満たないパリに、これだけの数の記念像がある。「犬も歩けば像に当る」わけである。パリ

に對抗意識を持つロンドンでは、個人記念像は一八四四年には二三基に過ぎなかったが、二十世紀になると第一時世界大戦の結果、功績者を顕彰するために著しく数が殖え、一九二八年には三五〇基以上となった。⁽²³⁾ブルボンの都パリに對抗してひたすら町の美化に腐心したハープスブルグの都ウィーンでは、市民たちが冷笑気味に「ウィーンの人口の半分は彫像だ」と言うくらいである。これに反し日本では個人の記念像を屋外に飾るような習慣を、近年まで持ち合わせなかった。明治初年に日本人は西欧の科学技術の一環として彫刻技法をも輸入したものの、西欧の都市景観を模倣して個人記念像を屋外に建立したのは、ようやく明治二六年（一八九三年）のこと、東京靖国神社境内の大村益次郎（日本の陸軍の創設者）の像が最初であった。⁽²⁴⁾これ以後日本中の諸都市で銅像の建立が相次ぎ、四十年後の昭和八年（一九三三年）には、すでに全国でその数七〇〇基に達したと言われるが、その大部分は官公庁や私企業の内建に建てられた功績者や創立者の銅像であって、公園や広場に設けられた有名人の記念像の数は、まことに微々たるものであった。私は以上のような現象の背後に、西欧文明と日本文明の本質的差異があることを痛感せずにはおれない。

(21) 日本では野外に置かれた記念彫像は、フランスやイタリアのような大理石像がほとんどなく、大多数は青銅製なので、一般に銅像と呼び習わされている。

(22) 石造の金次郎像は戦後まで残ったが、校舎の改築の際に撤去され、現在名古屋市内に現存する数は十指に満たないと言われている。戦後の新造は一基もない。

(23) Lord Edward Gleichen; London's Open-Air Statuary. 1928, p. xv.

(24) 明治十年（一八七七年）に金沢の兼六園内に、日本武尊の銅像が建立されたが、日本武尊は皇室の祖先の一人として崇拝され、その歴史的事実性を疑問視されている人物であるから、この銅像は宗教的偶像であって個人記念像の範疇にはいるまいと思われる。

かったのである。

いったい個人の彫像を屋外に、それも晴れがましい公共の場所に建立するという現象は、権威や権力において、または功績や才能、技量において、衆に優越した個人の姿を、青銅や大理石の彫像に刻んで永続化し、その個人の功業をできるだけ多くの市民が顕彰し記念し追憶し敬慕するということであって、個人崇拜の一形態であると考えられる。もちろん場合によっては個人崇拜の直接的結果というよりは、国家権力が為政者の記念像を建立して、愚民統治の一手段とするとか、あるいは一私人が自己の彫像を巷間に残して、異常な虚栄心を満足させるとかいうこともあるが、その際でもなお社会一般に個人崇拜を是認する心理的基盤がなければ、一基の記念像といえども破壊されずに無事に存続することはあり得まい。従って個人記念像の建立は、個人崇拜を是認する個人指向型社会の文明(すなわち古くはギリシア・ローマ文明、新しくは西欧文明)に特有の事象であって、集団指向型文明の日本文明にとっては、異質的なものと感じられる。それ故に西欧における個人記念像の由来と発展経過を追及するならば、それは西欧における個人崇拜、ひいては個人主義の由来と発展経過を説明する補助的手段となるのではなからうかと、私は考えたのである。

問題は個人記念像のみに限らない。西欧においては、特定の個人の名前を教会その他の公共建築物や建造物(城壁、橋、塔など)に冠する習わしがある。(例えば、ローマのサンピエトロ大聖堂(Basilica di San Pietro in Vaticano)、ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館(Victoria & Albert Museum)、パリのエッフェル塔(Tour Eiffel)、ミュンヘンのルードヴィヒ・マクシミリアン大学(Ludwig-Maximilian Universität)、プラーハのカルル橋(Most Karlův)など無数。)あるいは個人の名前を都市の名称や道路、広場、公園などの地名に付する仕来りも盛んである。(例えば南ドイツのアウクスブルク(Augsburg)、ローマのアッピウス街道(Via Appia)、ウィーンのマリーア・

テレージエン広場 (Maria-Theresien Platz)、『ロンドンのセント・ジェームス公園 (St. James's Park)』、パリのオースマン大通 (Boulevard Haussmann)、『など』それに本来の西欧ではないが、西欧文明の出店であるロシアにおいても、ペチェルブルク (Петербург)、『ゴリキ (Горький)』、フルンゼ (Фрунзе)、『スターリングラート (Сталинград)』など多数ある。このような事象もまた個人指向型社会の西欧文明に特有のものであって、集団指向型社会の日本文明にとっては、きわめて縁遠いものである。⁽²⁵⁾従ってこれらの異質的事象を捉えて歴史的にその由来を解明することは、西欧文明が近代以降発展させた個人主義を本質的に理解する一助となるのではなからうかと、私は思考したのである。(しかしこれらの問題は、本稿の「近代篇」の重要課題であって、その考究は遙かな後日のことになろう。)

以上のような問題を考える場合、最も手っ取り早い研究方法は、西欧諸国で出版されている百科辞典に当って、問題の概略を把握し、同時に関係文献を教示されることである。そこで私は次のような百科事典を参照して、該当項目とおぼしき箇所を調べてみた。

Meyers Enzyklopädisches Lexikon. 1971～79. 25 Bände.

Brockhaus Enzyklopädie. 1966～81. 25 Bände.

Encyclopaedia Britannica. 1868. (rp. 1968). 24 volumes.

Le Grande Encyclopédie Larousse. 1971～77. 21 tomes.

(25) 日本で個人名を付した都市は、豊田^{とよだ}佐吉の名を冠した豊田市ひとつのみである。もっともこれは自動車メーカーのトヨタ自動車工業の名を借りたものであるから、トヨタ市と読まずトヨタ市と読むことになっている。

Lessico Universale Italiano. 1968〜81. 24 tomi.

Большая Советская Энциклопедия 1949〜58. В51 томех.

ところが、「記念像」あるいは「彫像」という項目を引いて失望したことは、どの事典もその項目の記述にわずか半頁から、多くて三頁しか割いていないため、私の期待に十分見合うだけの情報が得られないことであった。せめてもの収穫は、ブリタニカ百科事典が「記念物と記念碑 (Monuments and Memorials)」の項目に約二頁半、古代オリエントから現代に至る東西両洋の記念物について歴史的概説を載せ、またブロックハウス百科事典が「記念物 (Denkmal)」の項目に約一頁半、古代ギリシアから西洋現代に及ぶ記念像について歴史的素描を行なっていることであった。ブリタニカ百科事典の当該項目はアラン・ゴウワンス (Alan Gowans) 氏 (美術史または装飾史の研究家らしい) の執筆によるが、いかにもイギリス人らしい広大な全人類史的視野でもって古今の諸文明の記念物に論及している。しかし残念なことに、その論述はあまりに簡略に過ぎ、また記念像のもつ性格や意味については、ほとんど考察を行なっていない。またブロックハウス百科事典の方は執筆者不明だが、いかにもドイツ人らしい独善的かつ偏狭な文明観に終始し、古代ギリシア (西欧人の称する古典古代) から真直に現代西欧世界に至る単線的系譜のみを論じて恬然としている。しかしこの項目の末尾に参考文献が九篇列挙されているのは、他の事典には見られない例外で、貴重な情報と言えよう。(これらの参考文献はいずれも第二次大戦以前のもので、現在入手可能なものは、フリードレンダーとハフトマンの二著のみである。従って文献目録は後の方にまとめて付記するに留める。)

要するにこれら二種の百科事典の短い記述からは、私は自分の考察を進めていく上で若干の貴重な示唆を与えられはしたものの、事前に予期したような、古今東西に亘る個人記念像の歴史的概説とその内面的論究とはほとんど得られないことを、否応なしに知らされた。従ってこの論題に関しては、自身の貧しい知識と乏しい主観的判断とを頼り

にして、自力で解答を引き出さざるを得ないことを痛感したのである。

そこで次に私が参看したのは、第一次大戦前のドイツのライプツィヒ (Leipzig) で出版された「ベーデカー旅行案内書 (Baedekers Reisehandbücher)」であった。第一次大戦前夜の一九一四年に英語版だけでも二八種類を刊行していて、ヨーロッパ諸国、北アメリカはもちろんのこと、北アフリカ、西アジア、インド、シベリア、中央アメリカまでを覆っていた当時の「ベーデカー」は旅行案内書の王者たる名に恥じず、高度の知識階級を対象として学問的にも信頼性が高いとの定評があった。そしてありがたいことに、この「ベーデカー」は、欧米主要都市の個人記念像をほとんど網羅し、その主要なものについては短い解説を載せていたのである。

私は西欧諸国の主要都市の個人記念像をひとつひとつ摘記して、その設立年代を調べたのち、近代の西欧において屋外に初めて建立された個人記念像は一四五三年に北イタリアのパードヴァ (Padova) の町に建立されたドナテッロ (Donatello) 制作のガッタメラータ (Gattamelata) 騎馬像⁴¹であることを知った。当時地中海貿易を独占して全欧随一の繁栄を誇ったヴェネツィア共和国は、自国の防衛のため忠勤を励んでくれた傭兵隊司令官エラズモ・デ・ナルニ (Erasmus de Narni) を顕彰し、巨匠ドナテッロに依頼してその青銅像を鑄造させ、自国領パードヴァの町のサン・タントーニオ大聖堂 (Basilica del Sant'Antonio) 前の広場にそれを設置させたのである。⁽²⁶⁾ (ガッタメラータはエラズモの綽名で「虎猫」の意) ドナテッロはこの騎馬像を制作するに当り、実に千三百年もまえのローマ皇帝

(26) 一九八二年の夏、私がパードヴァを訪れたとき、この歴史的記念像は五百年の風雪に耐えて、広場の一角に、実に無造作に建っていた。通りすがりの市民の中にはこの彫像に一顧の礼だに払う者はなく、ただ無数の鳩だけがエラズモの姿を隠さんばかりに群って遊んでいた。

マルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius) 帝の騎馬像¹²⁾から着想を得たと言われているが、この騎馬像はガッタメラータの姿に比して馬が大き過ぎて躍動感に乏しく、到底見事な出来栄えとは評しかねる。アウレリウス騎馬像はキリスト教を公認したコンスタンティヌス (Constantinus) 大帝の彫像と誤認されたため、中世期の偶像破壊の難をも免れて生き延び、ドナテッロの時代にはローマ市の東南隅にあるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂 (Basilica di San Giovanni in Laterano) の傍らに設置されていた²⁷⁾。ルネサンスは神中心的な西欧中世を跳び越えて人間中心的な古代地中海世界に範を求めた学芸復興運動であるが、ドナテッロの騎馬像もまた、古代ローマの個人記念像の復活なのであった。そして古代ローマの個人記念像の源流を辿ると、古代ギリシアを通して、遙かに遠く古代オリエントの個人彫像にまで遡ることができる。要するに西欧の個人記念像は、古代オリエントからローマ帝国まで三千年の成長過程を経て一応完成した原型が、キリスト教に支配された中世社会一千年の長い断絶を経て、ルネサンスに至り再興されたものである⁽²⁸⁾。

とにかくこのような次第で、私は個人記念像の歴史を遠く古代オリエントの源泉まで遡って追求せざるを得なくなつた。そしてさらに個人記念像の発生源である個人彫像を尋ねて、先史時代をも簡単に回顧する必要に迫られた。しかし古い時代の彫像については、少数の例外を除いて、その現物が街頭や公園に建っているわけではなく、ほとんど博物館や美術館に珍藏されているため、各時代の彫刻を取り扱っている考古学や美術関係の書物に当って調べるほかはなかった。(参考した文献・資料の目録は、それぞれの章末に添付する。)

近代以降の西欧に関しては、主として前述の「ベーデカー旅行案内書」に依拠したが、それも主として第二次大戦以前(場合によっては二〇世紀初頭)の版を利用した。今日西欧諸国に関する旅行案内書としては、フランスのタイヤメーカーによる「ミシュラン案内書 (Guide Michelin)」とイギリスの「ブルー・ガイド (Blue Guide)」が重宝が

られているが、しかし両者とも個人記念像の記載についてはきわめて簡略で、戦前の「ベーデカー」に較べると随分見劣りがする。第二次大戦後の「ベーデカー」は、出版書肆をフライブルク (Freiburg) とシュトゥットガルト (Stuttgart) に移して刊行を続けているが、その体裁だけはマイカー観光客向きに大版に改め、カラー写真をふんだんに採り入れて俗受けのする美麗本になった代わり、内容はそれに反比例してかなり味の薄いものになり、地図に至っては全く他愛もない子供囁しになってしまった。昨今はドイツ人でさえ、「ベーデカー」を敬遠して「ミシュラン」を愛用すると言われるが、その「ミシュラン」でさえ戦前の「ベーデカー」の後塵を拝するとするならば、それは両度の世界大戦によって西欧の文化水準が相対的にも絶対的にも低下したことを示すひとつの懲憑であろうか。それとも第二次大戦後の西欧出版界が、かつてのエリート知識層の需要を見限って、大衆社会の平均的読者層の嗜好に調子を合わせたことの、ひとつの例証であろうか。

さて本筋に立ち帰るが、先史時代に起源を有する個人彫像は、その制作目的が何であれ、個人が曲りなりにも集団の広場に移された。一九七二年にここを訪ねたとき、千八百年の年輪を刻むこの彫像は、青銅製と見えないほど白茶けていた。大気の汚染が彫像の腐蝕を早めたという。一九八一年から国立文化財修復研究所で、四億円かけて修復し、一九八九年四月に完成、先の場所にはレプリカが置かれている。

(27) この像はその後一五三八年に、ローマ市の中心カンピドリーヨ (Campidoglio) 丘に立つ市庁舎 (Palazzo Senatorio) 前の広場に移された。一九七二年にここを訪ねたとき、千八百年の年輪を刻むこの彫像は、青銅製と見えないほど白茶けていた。大気の汚染が彫像の腐蝕を早めたという。一九八一年から国立文化財修復研究所で、四億円かけて修復し、一九八九年四月に完成、先の場所にはレプリカが置かれている。

(28) 西ローマ帝国が没落してから、古代地中海世界の文化を継承してこれを発展させ、七百年後にそれを西欧世界に手渡したのは、イスラーム世界であった。しかしイスラーム教は偶像崇拜をきびしく拒否したため、予言者やカリフの彫像はもろろのこと、世俗的な王侯の彫像さえ制作されなかった。従って個人記念像に関する限り、イスラーム世界は古代地中海文化の継承者とはなり得なかった。

から析出され、個人的存在として意識されたとき、初めて出現したものと考えられる。つまりそれは、最も素朴な形で個人の認識の産物なのである。ここで認識された素朴かつ原初的な個人が、西欧近代の個人彫像に見られるような、その内在的価値(先天的才能と後天的技量)のみを顕彰されるきわめて個性的な個人にまで立ち到るためには、当然個人認識の度合いにおいて、幾つかの発展段階を経るものと考えられる。従って私は、個人彫像の歴史的考察を進めるに当り便宜上次のような発展段階を設定して、彫像の性格規定を行なうこととした。

○萌芽段階——特定の個人が初めて集団とは異なる個別的存在として意識されるが、しかしまだ他の個人との区別が明瞭でない。従って彫像の容貌は個性的には表現されず全く類型的である。個人の価値はまだ一切認識されていない。

○第一段階——特定の個人が他の個人と区別されて意識される。従って彫像の容貌はいささか個性的に表現される。個人の付加的価値(身分・地位)は認識されるが、内在的価値(先天的才能と後天的技量)はまだ認識されない。個人崇拜の初発的段階である。

○第二段階——特定個人の付加的価値はもちろんのこと、内在的価値もある程度認識される。従って彫像の容貌は個性的に表現される。ただしその内面的価値の認識は、国家に対する功績の場合に限られる。個人崇拜の中進的段階である。

○第三段階——特定個人の内在的価値が余す所なく認識される。従って彫像の容貌は、単に外面的個性だけでなく、その内在的価値を示唆するような内面的個性をも表出している。その内在的価値の認識は国家に限らず、広く社会一般に対する種々の貢献による。個人崇拜はこの段階に至って完成する。

さて以上のような個人認識の度合いは、必然的に彫像の有する性格(ないしは目的)や、表現される個人の種類を

次のように規定する。

○萌芽段階——彫像は呪術的性格を有し、人間の形姿を執りながら、实体は出産・豊穰を祈念するための地母神とか、副葬品としての魔除けとかの非人格的存在である。

○第一段階——彫像は宗教的性格を有し、神殿への奉納像、墳墓の副葬品、神格化された王侯像などである。従って表現される特定個人は宗教的權威を有する主権者（王侯）か、それに依存する付属者（神官・役人など）である。

○第二段階——彫像は政治的性格を有し、個人の国家的功績を讃える記念像である。従って表現される特定個人は、国家の主権者か、その政治的権力に従属する功績者である。

○第三段階——彫像は社会的性格を有し、個人の才能や技量、ひいては社会的功績を讃える記念像である。従って表現される特定個人は宗教的權威や政治的功績において優越した人物ではなく、その才能と技量において、またその結果たる社会的功績において卓越した人物、いわば社会的有名人である。

このように見てくると、個人認識の度合いによる諸段階は、それぞれ萌芽Ⅱ呪術的段階、第一Ⅱ宗教的段階、第二Ⅱ政治的段階、第三Ⅱ社会的段階と呼称することも許されるであろう。

さて、以上のように設定した発展段階を通観すると、本稿が扱う個人記念像とは、この中の第二、第三段階の彫像であることが、おのずから了解される。一五世紀に北イタリアで再興されたあの近代最初の個人記念像、ガットメラータ騎馬像は、明らかに第二Ⅱ政治的段階に属するものであり、これに続いて一四九三年、ヴェネツィアのサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ教会（Chiesa SS. Giovanni e Paolo）まえの広場に建立された傭兵隊司令官コッレオー

ニ (Colleono) の青銅製騎馬像も同種のものである。^{図3(28)}

その半世紀後の一五五九年、北イタリアの町ヴェローナ (Verona) のシニョーリ広場 (Piazza del Signori) のアーチの上に設けられた病理学者ジロラーモ・フラカストーロ (Girolamo Fracastoro) の大理石立像は、^{図4(29)}西欧近代において屋外に建立された最初の第三Ⅱ社会的段階の記念像であると見做される。ヴェローナの町の開業医フラカストーロは一五三〇年に医学詩『梅毒、別名フランス病 (Syphilis sive Morbus Gallicus)』を著わして梅毒の水銀療法を勧め、パストゥールに先立って微生物病原説を提唱した偉大な科学者であった。そのかれが死後間もなく、第三段階の濫觴となるべき記念像の屋外建立という榮譽に浴したことは、その半世紀まえにコロンプスの探検隊によって新大陸からスペインにもたらされたと言われる梅毒が、早くもフランス王シャルル八世 (Charles VIII) の軍隊によって北イタリアに到達し、この地でいかに猛威を振るっていたかを如実に物語るものである。

しかしこれ以後は、北イタリアの諸都市で個人記念像の屋外建立の風習が徐々に進んだにもかかわらず、それらはすべて第二段階に属する王侯の彫像であって、第三段階のものは、同じヴェローナのシニョーリ広場に、当市出身の文学者兼考古学者シピオーネ・マッフェイ (Scipione Maffei) の記念像が設けられる一七五六年まで、実に二百年間杜絶していたのである。(あるいはこの期間中に建立された実例がほかにあったかも知れないが、現存するもの以外は調べる方法がない。) また個人記念像建立の風習は、十七世紀以後、ようやくアルプスを越えて北欧諸国へ伝わったが、建立されたものはすべて王侯の勇壮な騎馬像ばかりで、第三段階の記念像の出現は、一九世紀を待たなければならなかった。要するにイタリアに復活した個人記念像は、まず王侯の騎馬像の姿で、十七・十八世紀の絶対王政下の西欧諸国に模倣され、十九世紀の市民社会の到来と共に、第三段階の記念像の爆発的盛行を見て今日に至っている。実に第三段階の記念像こそは、近代資本主義の発展と共に社会的実力を貯えた有産市民層の、個人的自覚と社会的自

信の具体的表現であつたと言うことができよう。(本稿は「近代篇」において、この辺の消息を細叙するつもりであるが、前途遼遠である。)

なおこのような発展段階と厳密には平行しないが、個人記念像の発展を規定する判断標識が既述の三頁目(個人認識の度合、彫像の性格、表現される個人の種類)以外にも幾つか考えられる。例えば彫像様式、彫刻技法、設置場所などである。結論を先取りして言えば、彫像様式は類型的様式から個性的様式へ、彫刻技法は観念主義から写実主義へ、設置場所は特権身分の占有区域(神殿、墳墓、王宮、貴族邸など)から自由市民の日常生活の場(広場、街路、公園、公共建築物など)へ、という変化が観察される。本稿はこれらの判断標識についても、それぞれの時代、時期について考察する予定である。

(28) この彫像は、一四八一年ヴェッロッキョ(Verrochio)によって制作されたが、その弟子レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)も協力したと見られている。私は前後三回、この彫像を訪ねて観賞したが、ラスキン(Ruskin)によって「世界で最も輝かしい」と評されたこの彫像のもつ内面的深みにはいつも讃歎せずにおれなかった。

(29) この大理石像はダネーゼ・カッタネオ(Danese Cattaneo)により制作され、シニョーリ広場に面した旧市庁舎(Loggia del Consiglio)横の高いアーチの上から、俯向き加減に広場のかなたを見やっている。一昨年(一九八四年)の夏、ここを訪ねたとき、十九世紀建立のダンテ(Dante)の立像ばかりが目立つこの美しい広場には、人影もまばらであった。

(30) イギリスでは一六三三年、ロンドンのチャールズ一世像、フランスでは一六三五年、パリのアンリ四世(Henri IV)像、ドイツでは一七〇三年、ベルリンの大選定像フリードリヒ・ヴィルヘルム(Friedrich Wilhelm)像、ロシアでは一七八二年、サンクトペテルブルクのピョートル一世(Pётр I)像が最初である。

ブロックハウス百科事典「記念像」項目所収の文献目録

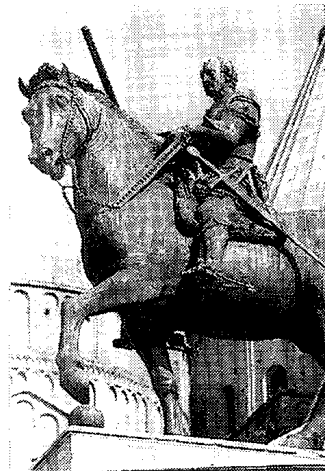
(この中、筆者が入手、披見したのは、3、5、7、8、9である。)

- 1 Köster, H. K. E.: Geschichte der Bildsäule bei den Griechen. ケスター『ギリシア人の彫像の歴史』小論文、一八五七年の発表。
- 2 Hofmann, A.: Geschichte des Denkmals. ホフマン『記念像の歴史』『建築便覧』所収。一九〇六年。
- 3 Friedländer, L.: Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms. フリードレンダー『ローマ風俗史』四卷。第一〇版、一九一〇—一九二二年。
- 4 Riegel, A.: Der Moderne Denkmal-Kultus. リーゲル『近代の記念像崇拜』『歴史論文集』所収、一九二九年。
- 5 Hager, W.: Die Ehrenstatuen der Päpste. ハーゲル『ローマ法王の記念像』一九二九年。
- 6 Schlosser, J. v.: Vom modernen Denkmal-Kultus. シュロッサー『近代の記念像崇拜』『ワールブルク図書館紀要』所収。一九三〇年。
- 7 Clemen, P.: Der Denkmal-Begriff und seine Symbolik. クレーメン『記念像の概念とその象徴性』一九三三年。
- 8 Dahl, L.: Das barocke Reitermonument. ダール『バロック時代の騎馬像』一九三五年。
- 9 Haftmann, W.: Das italienische Säulemonument. ハフトマン『イタリアの記念碑』一九三九年。

(受理日 平成十九年四月十一日)



(4) フラカストーロ立像



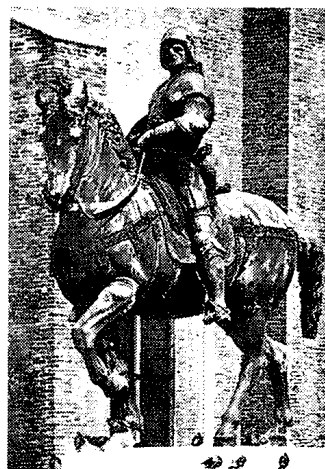
(1) ガットメラータ騎馬像



(5) マッフェイ立像



(2) マールクス・アウレリウス騎馬像



(3) コツレオーニ騎馬像